エッセイ

朝鮮大学校との学生交流企画の報告

斎藤敬太

1. はじめに

筆者は、津田塾大学において「マルチリンガリズム」という学部生対象の授業を担当している。この授業では、筆者の専門である社会言語学や日本語教育学といった観点から、日本で生活する海外にルーツを持つ人々の概要、来日理由、各コミュニティ、彼らの言語環境などの現状や課題などについて扱い、これらを知ることにより多文化共生について考えるきっかけとなることを主な目的としている。

しかし、多文化共生を考えるきっかけとしては授業で紹介するような人々である当事者と直接交流することが一番の近道である。そこで、2018 年度より、この授業の履修生の中から希望者を募り、津田塾大学の近隣に位置する朝鮮大学校に在籍する在日コリアンの学生との交流を目的とした「津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校　見学・学生交流企画」（以下「学生交流企画」）を計画・実施している。

2018 年度の実施後、参加者から多くの高評価を受けたことから、引き続き 2019 年度も実施した。

本稿では、2019 年度の学生交流企画の実践報告を行う。

2. 「マルチリンガリズム」の概要

筆者が担当する「マルチリンガリズム」では、上述の通り日本で生活する海外にルーツを持つ様々な人々について、主に社会言語学の観点から彼らのコミュニティや言語環境などを紹介している。2019 年度も 2018 年度に引き続き第 4 タームに開講し、全 9 回であった。2019 年度に実施した授業内容を表 1 に記す。

各回およそ 110 ～ 120 名が受講しており、最終回の試験受験者数は 132 名であった。

各回の授業内容詳細については割愛するが、学生交流企画で交流することになる「在日コリアン」については、第 2 回のテーマであるオールドカマーとして在日中国人（老華僑）と共に取り上げた。なお、「在日コリアン」という用語は、「マルチリンガリズム」においては戦前から戦後すぐまでの時期に来日した朝鮮半島出身者及びその子孫を朝鮮籍・韓国籍・日本国籍に関係なく「在日コリアン」として紹介し、戦後に大韓民国から来日したニューカマーの「在日韓国人」とは区別したものとしている。

表 1. 2019 年度の授業内容

第 1 回 (11/20)	本授業の概説、外国人住民の概要
第 2 回 (11/27)	オールドカマーとニューカマー①—オールドカマーのコミュニティー
第 3 回 (12/4)	オールドカマーとニューカマー②—ニューカマーのコミュニティー
第 4 回 (12/11)	外国人集住地域と外国人散在地域
第 5 回 (12/18)	外国人住民の言語環境
第 6 回 (1/8)	日系人
第 7 回 (1/15)	ブラジル人集住地域
第 8 回 (1/22)	外国人と方言
第 9 回 (1/29)	まとめ（試験）

3. 学生交流企画の目的

様々な国・地域からやって来て暮らしている人々が日本国内で増えており、「マルチリンガリズム」においてはそのような人々を紹介しているが、海外にルーツを持つ人々と関わりをそこまで持ったことのない学生も少なからず存在している。また、関わりを持ったことのある学生

でも、語学教師や留学生といった人々との関わりのみで、オールドカマーの人々や生活者としてやって来た人々と交流したことのある学生はそこまで多いわけではない。

そこで、この学生交流企画を通してそのような人々と直接交流することで、異文化理解、エポケー、多文化共生などについてより身近なものとして考えてもらうことを目的とした。

4. 在日コリアン

在日コリアンは、他の集団と比べて日本に古くから暮らしていながらも、彼らがどのような人々なのかを知らない学生が少なくなく、最近来日した韓国人（ニューカマー韓国人）と混同する者も一定数いる。これは 2018 年度の「マルチリンガリズム」履修生にも見られた。また、「在日コリアン（あるいは在日朝鮮人）」がニューカマーの韓国人とは異なるということを知っている人々の中には、在日コリアンにあまり良いイメージを持っていない者も少なくない。筆者の周辺にもそのような人がある程度いることも事実である。

これは、在日コリアンの団体の一つである在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総聯）が支持する朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が日本とは正式な交流を持っていないこと、またこれらに対する日本のマスコミの報道などによるものが主な理由であると考えられる。

また、在日コリアンについてはそのようなメディアではあまり取り上げられておらず、彼らと直接交流があったり、自ら在日コリアンについて調べたりしたことがない人々にとっては「どのような存在なのかよく分からず、近寄りがたい」というのが実態である。

日本に何世代にもわたって暮らしており、日本のすぐ隣にルーツを持つ存在でありながら、交流を持つことが少ないということは非常に勿体無い。

上述の朝鮮民主主義人民共和国が支援する在日コリアンの教育機関として全国に 67 のウリハッキョ（朝鮮学校）が存在するが、その中で唯一の大学校（日本の大学に相当）が、学生交流企画で協力を得ている朝鮮大学校である。

朝鮮大学校は 1956 年に創立された。1959 年に東京都小平市に校舎を移転し現在に至る。8 つの学部、朝鮮文化コース、研究院などがある。

津田塾大学から徒歩圏内に朝鮮大学校があるため、交流をするのに適した条件といえる。これらの理由から、2018 年度より「津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校　見学・学生交流企画」を計画するに至った。

5. 2018度実施の学生交流企画との違い

2019 年度の学生交流企画は、2018 年度と同様に

①朝鮮大学校食堂での昼食交流
②朝鮮大学校内の各施設の見学
③両大学の学生同士のフリートーク

という内容で実施したが、「②朝鮮大学校内の各施設の見学」の中に「朝鮮自然博物館」及び「朝鮮歴史博物館」の見学が新たに加えられた。これは 2018 年度の参加者の感想にあった「博物館を見学したかった」という声を反映したものである。各内容の詳細については後述する。

6. 学生交流企画実施まで

まずは津田塾大学及び朝鮮大学校に企画実施の承諾を得た。授業では前述の通り第 2 回の授業でオールドカマーとしての在日コリアンについて紹介し、在日コリアンの来日時期や主なコミュニティ、朝鮮学校、言語などを概説した。授業後半で「第 2 回　津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校　見学・学生交流企画」の実施についてアナウンスを行い、2018 年度に実施した第 1 回学生交流企画の様子を紹介し、現時点での参加希望者数を確認した。なお、この企画は自由参加かつ授業期間終了後に行われるものである旨も伝えた。

第 4 回の授業で候補日を挙げ、参加希望者から参加可能日を聞いた。

第 5 回の授業で日程が 2020 年 2 月 1 日に決定したことを伝え、その上で改めて参加希望者を募った。

当初の想定を超える人数であったため第 6 回

の授業で参加希望者の募集を締め切り、第7回の授業で最終確認をした。

最終的には2年生～4年生20名及び筆者以外の教員2名の参加希望者が集まった。参加希望者には、事前に質問したいことについてメールで送らせた。

以下に学生から送られた質問を記す。この質問は朝鮮大学校にも送ったが、質問は修正を加えず、学生の考え・認識がそのまま伝わるようにした。

○学校関係

・どのようなところが朝鮮大学校の魅力と感じて入学を決めたのか
・朝鮮大学校以外の進学先を検討したか
・朝鮮大学校のいいところ、悪いところはどんなところか
・朝鮮大学校の詳しい設立の経緯や、普段の学校生活について知りたい
・北朝鮮と学校の関係
・在日以外の人たちも一緒に学んでいるか、朝鮮と韓国籍の人も一緒に学んでいるか、それについておもうことはあるか
・一般の公立学校へ通う選択肢はあったか、通いたいと思ったことはあるか

○言語関係

・言語を複数使用する場合はどんなシーンで何を使うか、家族との会話、友人との会話、先生との会話
・朝鮮語を学ぶきっかけとなったのは自分から学びたいと思ったからなのか、親が学んでほしいと望んだからなのか
・よく親の母語を継承することは親とコミュニケーションをする際に重要である、や親の文化を継承できる、や自分のアイデンティティを確立できると聞くがそれは実感しているか
・韓国語と日本語、どちらが母語なのか
・日本語（韓国語）が母語の場合、もうひとつの言語を第二言語として身につけたいと思うか
・家庭では韓国語と日本語のどちらを話すのか
・学校で学ぶ言語、日常会話で使う言語について
・大学内の言語使用状況が知りたい、学生同士の会話・講義は韓国語なのか、日本語を使用する場面はあるかなど

○生活関係

・日本、又はルーツのある国での差別的な経験があるか、あるとしたらそれはどんなものか
・自らのバックグラウンドにより、日常で困ることはあるか
・生活する上で文化や習慣の違いを感じるのはどんな時か
・日本でお気に入りの場所、よくいくところ
・将来は何をしたいか
・このまま日本で暮らすつもりか、韓国へ行くつもりかどうか
・日本で育つと、将来韓国に戻ったときに、差別や偏見やいじめなどを受けることはあるのか（実際に私の知り合いで、両親が韓国人で日本で生まれ育った人が、徴兵制で韓国に帰ったら虐められると言っていましたが、みなさんはどうなのでしょうか）

○文化関係

・自分のアイデンティティはどちらの国の文化、考え方で成り立っていると思うか
・いつごろから自分のルーツについて知っておくべきだと思うようになったのか
・在日コリアンを取り扱った映画「パッチギ」などが、彼らを極端に野蛮ともとれる印象で描いたことについてどう感じるかついてどう感じるか
・家庭の料理・文化はどんな風か
・自分の思う日本人との相違点、共通点はあるか
・韓国を祖国として捉えているのか

○交流関係

・地域との交流などはあるか
・他の学校の生徒との交流は頻繁にあるのか

○政治関係

・今の日韓の現状についてどう思うか

・ここ数年日韓の関係が特に悪化してきているが影響のようなものはあるのか、またそれに対してどう思っているのか
・現在の日韓関係の悪化について、日本にいる在日コリアンの立場としてどのように捉えているのか
・日本の在日コリアンへの制度や考え方などで、どういった点に問題があると思うのか、またどのように変えてほしいのか
・日本の制度（特に教育 朝鮮学校は一般の公立私立学校とは違う区分である点等）についてどう思うか

7. 学生交流企画当日

当日は欠席者がいたため実際の参加者は 16 名（筆者は除く）だった。

学生交流企画は、前述の通り、次の内容で実施した。

①朝鮮大学校食堂での昼食交流
②朝鮮大学校内の各施設の見学
③両大学の学生同士のフリートーク

2018 年度に引き続き、まずは朝鮮大学校食堂で津田塾大学と朝鮮大学校の学生で食を共にし、学生同士の心理的距離を縮めた（図 1）。食を通した異文化交流により、食後の見学についても和やかな雰囲気で行われた。

図 1. 朝鮮大学校食堂での昼食

見学では、朝鮮大学校の敷地内にある研究棟、図書館、講堂、広開土王碑のレプリカ、朝鮮自然博物館、朝鮮歴史博物館、鳥類の飼育小屋、売店等を案内してもらった（図 2）。

基本的には朝鮮大学校の教員が引率・解説を行ったが、常に両校の学生が一緒に会話を楽しみながら移動しており、また、図書館や博物館では朝鮮大学校の学生が津田塾大学の学生を案内する時間もあり、学生同士の交流が様々なところで垣間見えた。

図 2. 校内見学の様子

最後に、校内のカフェを貸し切り、両校の学生同士のフリートークを行った（図 3）。フリートークでは筆者を含め両校の教員は学生の会話には入らなかった。学生の人数が多いためにグループに分ける必要があること、学生のみの方が教師を気にせず自由に会話できることなどから、2018 年度も同様に学生のみにしたが、2019 年度もこれを引き継ぐ形とした。なお、2019 年度は首都大学東京と朝鮮大学校の学生交流企画も実施したが、この時は首都大学東京の参加者が 5 名（筆者を除く）と少数だったため、一つのグループで教員も交えたフリートークとした。

図 3. フリートークの様子

また、前述の通り「マルチリンガリズム」では社会言語学に関する内容を扱っているため、学生交流企画では学生に敷地内に見られる言語景観（看板、ポスターなど）に注目させている。授業でも在日コリアンの朝鮮語の使用や、朝鮮語と日本語の言語接触により生まれた在日コリアン独特の言語について紹介しているが、校内の言語景観を目にすることで、彼らの言語環境を実感することができるからである。

8. 学生交流企画参加者の感想

学生交流企画終了後、学生にはメールで感想を提出させた。

以下に、参加者がメールで送った感想を、改行等や明らかな誤字脱字のみ修正したほぼ原文で掲載する。

①先日は朝鮮大学校交流会にて大変貴重な経験をさせていただきました。企画してくださりありがとうございました。

食事の場で距離を縮めた後に図書館や博物館といった朝鮮大学校の学生が実際に使用している施設を見学させていただけ、その後座談会で疑問に思っていることを遠慮せずに聞くという順序のスケジュールのおかげでとても濃い時間を過ごすことができました。

食事の場や図書館見学の際に朝鮮大の学生と話しただけで自分よりも何倍も自分の民族やルーツについて知っていると実感しました。そのため、座談会で自分の民族のことなど真剣に知ろうともせずに成人してしまった自分が大したことない質問を投げかけることは失礼なのではないかと当初思っていました。

しかし、質問をしたところ、そのようなことを考えたことがなかったととってくださり、真剣に答えてくださりました。さらに、それ以上のことを答えてくださるとともに、座学では教えてもらうことのできない衝撃の実体験を話してくださいました。結果的に聞きたいことを思い切って聞いてみて正解だったと思うことができました。

同じ年齢で普通に津田の大学生と話す感覚で話せる彼らから聞く言葉だからこそ、その一つ一つが自分にとっては驚きと新鮮さでいっぱいでした。来年度もこのような企画があれば受講者にとって視野が広がるとてもいい機会になると思います。

改めてこのような場を用意してくださりありがとうございました。

②私はこのプログラムに参加して、正直とても複雑な気持ちになりました。

施設見学や座談会を通じて、在日朝鮮人の皆さんがどのようなことを思いながら生活しているのかを本人たちの言葉で聞くことができました。

また、物事に対する考え方や見方の違いも身を以て体験しました。

彼らの話を聞きながら理解できる部分もあれば理解できない部分もあり、少しショックを受けた部分もありました。でも、このプログラムに参加していなかったらこの違いを言葉では知っていても実際には知らないままだったと思うので、しっかりと知ることができてよかったなと思います。

今回自分が学んだこと・感じたこと・気づいたことをこれからの学びに結びつけていきたいと思います。

約 4 時間という短い時間でしたが非常に有意義な時間を過ごすことができました。

ありがとうございました。

③朝鮮大学校に行くまでに頭の中にあったのは、何か質問をする際には朝鮮大学校の方に不快な思いをさせないように不適切な表現はないかなど慎重に配慮をするということを考えていましたが、質問せずとも、彼らのほうから朝鮮大学校の実態、在日朝鮮人に対する差別、偏見、などの聞きづらいエピソードを話してくれました。つらいエピソードを話していただき申し訳ないとも思いましたが、彼らは話し慣れているようにも思えました。

特に印象的だった話は、日本では彼らは難民扱いなので海外旅行、留学がしづらいということです。

海外に行くためにビザを何か月も前にとり、ようやく申請されたのに成田空港に行ったらなぜか搭乗拒否をされてしまい、しまいにはビザが必要ない国に行こうとしても空港で拒否されたため、結局どこにも行けずお金を無駄にしただけだったという話が聞いていて胸が痛くなりました。

今までは彼ら在日朝鮮人と交流する機会がなく当事者意識がありませんでしたが、この交流を通じて実態を知ることができ朝鮮という名前からくる漠然とした怖いイメージが払しょくされました。彼らと話していたらとても楽しく国籍をこえて交流することができたのでどうして差別・偏見が存在するのだろうかと考えるきっかけになりました。在日朝鮮人の実態を知ればそのようなネガティブなイメージはなくなるだろうと感じました。

あとは、在日朝鮮人であることにあまり関係ないかもしれませんが、多言語を話す人が多くて刺激になりました。

朝鮮語、日本語に加えて英語と中国語を話せる 4 か国語話者の人が多かったです。

彼らは突然朝鮮語を話し、私は朝鮮語を知らなかったので焦りましたが、全く問題なくてよかったです。

また、母語が朝鮮語の方もいれば、日本語の方もいるので、反射的に出る時の言語は人それぞれだが、皆さんのナショナルアイデンティティは朝鮮で、朝鮮人であることに誇りを持っている点も興味深かったです。

以上の感想から、学生交流企画が参加者にとって「異文化理解」「エポケー」「多文化共生」を考えるきっかけになったことが窺え、学生交流企画の目的をある程度達成できたと判断できる。

9. 今後の課題

今回は 2018 年度に引き続き 2 回目、筆者にとっては 2019 年 10 月に実施した首都大学東京と朝鮮大学校の学生交流企画を含めると 3 回目に当たり、ある程度企画の流れもスムーズに行えるようになった。

2018 年度の交流企画の際の課題点について考えると、まず、校内の歴史博物館及び自然博物館の見学を行いたいという点があった。これに関しては朝鮮大学校側と調整をしたことにより、2019 年度は見学が実現した。

次に、フリートーク中の席替えをした方が良いのではないか、という点があったが、これについては 2019 年度は博物館見学が追加されたために、フリートークの時間としては前回より少々短くなり、それにより席替えをしなくても特に問題ない長さになったことで改善された。また、朝鮮大学校の学生が自主的に席替えしたところもあった。

2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、朝鮮大学校への訪問・見学が難しいと予想される（2020 年 9 月現在）が、その場合はオンラインでの企画など、様々な可能性を考えつつ、交流自体は継続していきたい。

（本学・非常勤講師）

謝辞

学生交流企画実施にあたり、朝鮮大学校の皆様にお礼申し上げます。特に、許哲先生には 2018 年度に引き続き調整から当日の引率まで大変お世話になりました。